



シーメール教師の日常
学校生活篇



一度イッタだけでは終わりません
クラスの男子全員が満足するまで
ボクは奉仕をしました

多くのおち○ポがボクを犯し
ボクはそのおち○ポに奉仕します
これがボクの日常です

「先生 ケツの穴を見せな」

「はい よろしくお願ひします」

ボクは生徒達のいう通り
自分からおしりを広げて
アヌスを晒しました

保健体育の授業です



「いやらしいケツマ○コだな」
「良く見えるぜ」

「ウニユ
ウニユ
蠢いて
いるなあ」

「チンチンを
欲しがっているみたいだぜ」

「ああ…
恥ずかしいです…」



「女みたいに恥ずかしがっているぜ」

「男のくせに」

「ああ…」

「言わないで…」

「オレ達に」

ケツの穴を晒して
喜んでるなんて
先生はド変態だな」



をを
ク事
ボウてをす
は言せルで
達とさワの
徒だ覚ジる
生男自イす

「男のケツの穴より
女のマ○コの方がいいぜ」

「キヤハハハ」

「ああ……」

「そんな……」

「先生の

ケツマ○コに

チ○ポを入れるのはやーめた」

「ギヤハハハハ」

生徒達はボクのアヌスを疼かせて嘲笑します



「ああん お願いします
先生のケツマ○コに
皆様のおチ○ポ様を
入れて下さいませ」

「はあ
はあ…
お願いします」

ボクは生徒達の前で
おしりを振って
おねだりをします
チ○ポを入れて欲しくて

ボクは先生のくせに
生徒のおチ○ポを
おねだりするので…



「ああん おねがい
おチ○ポほしいの…」

「そんなに欲しいのなら
オナニーしてみせろよ
面白かったら
入れてやるよ」

ボクはおチ○ポが欲しくて
オナニーを始めました

「今からオナニーショー
をはじめます
どうか見て下さい」

「先生のオナニーショーの
はじまりだあ」
「アハハハハハ」

実演

ボクはオナニーショーを
始めました
生徒達の前で



「先生になる前も
ケツの穴でオナニー
していただろ先生？」
「えっボクは…」

「こいつケツの穴に木建
指を入れてオナニーしているぜ」

「きもちわるー」

「していただろう 先生」

「…はい……してました」

ボクは自分の
オナニー経験まで
告白させられ
笑われます…



「ほらイケ ほらイケ」

「出せ 出せ」「ギャハハ」

生徒達は囃し立てます

「んんん…」

「アハ

こいつ

もう

出しそうだし

ボクは生徒達の視線と
嘲笑を浴びて
絶頂へと向かいます…





本
ど
び
ゆ
り
ど
び
ゆ
り

「いっつ 出したアー」

「きたねー」

「あああ…
ごめんなさい…
ごめんなさい…」

ボクは
生徒達の
前で
射精して
しまいました

アヌスを掻き回して
いってしまったのです…

「ほら舐めろよ マゾ先生」

「わん」

ボクは生徒達に連れ出され
散歩をさせられました

大勢の人達が見ている前で
生徒の靴を舐めさせられます





「二応これでも先生なんだぜ」

「しかも男 きもちわる」

「生徒の靴を舐めて勃起してるぜコイツ」

生徒達の言う通り
ボクは興奮していました
生徒達からの恥辱を
マゾの体は悦んでいるのです

「チンチン揺らして
みっともなーい」

「先生 恥ずかしくないのお」

ボクは体育の授業に
参加させられました

裸のまま
走らされます



「おっぱいも揺らして
イヤラシイ体ねー」

「おしりもプルプル揺れてるう」

生徒達はボクの体を見て
嘲笑します

どんなに恥ずかしくても
授業中は この体を
晒し続けなくては
いけないのです…



「アレ見てよ あいつ
チンチンから垂らしてるー」
「やだあ 興奮してる
サイテー」

生徒達はボクが興奮して
淫液を漏らしているのに
気付いて囁き立てます

ボクは恥ずかしさに
顔が赤くなります



「私達を見て興奮しているのー」

「それとも見られて興奮しているのー」

「どちらにしても変態よねー」

「キャハハ」

ボクは年下の生徒達に
バカにされながら
オチンチンを揺らして
走り続けます



「見てよ射精してる」

「授業中に出してる
きたなーい」

「先生のくせにバカじゃないの」

どぴゅっ

ボクは興奮のあまり
いってしまいました
ああ…見ないで…

どぴゅっ



「チ○ポに奉仕しろよ先生」

はい…ありがとうございます
おチ○ポ様に奉仕させていただきます

ボクの
目の前に
生徒の
荒々しい
おチ○ポが
突き出されます
ボクが心待ちにしていた
おチ○ポ様です



「先生のくせに生徒のおち○ポを舐めているぜ」

「ここ教室だぜ 先生」
「ギャハハ」

「ああ…おち○ポ いい…」

ああ：
生徒達に
バカにされ
笑われながら
ボクはおち○ポを
舐めました

先生なのに生徒のおち○ポに奉仕している
その背徳官がボクを興奮させます…





「ああっ」

生徒のおち○ポが
突然入ってきました

荒々しく

固い

おち○ポです

ボクのアヌスを

壊すような勢いで

掻き回します

優しさのかけらもない行為に

ボクの体は興奮しました

「ああん…もっと突いて…」



「あああん…あん」
「コイツ感じてるぜ」
「先生のくせに」

「ほら先生
チ○ポも
しっかりと
しゃぶれよ」

「あんっ
ごめんなさい…
あん…」

ああ…
生徒のおチ○ポ…



「ああああっーっ」
どぴゅっ どぴゅっ

「アハハ
先生
ケツマ○コで
射精したぜ」
「変態」
「変態」

生徒達に笑われながらも
ボクは幸せを感じていました

どぴゅっ

どぴゅっ

「ああー」

「ケツマ○コ同士
仲良くイキな」

ボクは連れていかれた先で
同じシームールの奴隷の方と
双頭デイオールドーで
繋げられました

「ああーっ」

「ああんっーっ」

大勢の見ている前で
ボク達はアヌスに
太いものを入れて
悦んでいるのです

「ひいひい」

「こいつら
ケツの中に
太いのを入れて
よがっているぜ
きもちわるー」

「こんな昼間の道で
交尾するなんて
ケダモノね
こいつ等」

「人間を捨ててるぜ
この変態共」
「キャハハ」

「ああん……」

見物人の方々は
ボク達の痴態に罵声と
嘲笑を浴びせます
普通の人間なら恥辱的で
つらいはずですが
マゾになったボク達には
より刺激的な愛撫のようでした



「ああっーっ」

どぴゅっどぴゅっ
どぴゅっどぴゅっ

「汚ねー」

「コイツら出してやるぜ」

「コイツら
ケツの穴で
いっちまった」

「アハハ」

「コイツら
男のくせに
ケツの穴で
女みたい
いっちま
いやがっ
たー」

「ギヤハハハハ」

「ああん
みないで…ああっ…」

どぴゅっ

どぴゅっ

ボク達マゾ奴隷2匹は
みんなの見てる前で
ケツマ○コに
太いおチ○ポのおもちゃを
入れて射精してしまいました



「お楽しみだったな変態教師」

「はい 散歩に連れて行っていただき
ありがとうございました」

ボクは再び教室へ行き
散歩の報告をします

いやらしいケツマ〇コを晒しながら…



「犬の姿で散歩したんだってな
裸で外に出て
恥ずかしいくないのか変態」

「はい…
恥ずかしいです…」

「でも 皆様に
このいやらしい姿を
たくさん見られて
嬉しかったです」

ボクは生徒達にケツマ○コを晒しながら
淫らな告白を続けます…

「ケツマ○コ同士 人が見ている前で
交尾したんだってな 人間を捨ててるな
この変態教師は」

「きもちわるー」

「ギヤハハ」

「はい…
ケツマ○コ同士
恥知らずにも人の前で
交尾しました
ごめんなさい…」

ボクのオチンチンは告白する度に
興奮して淫液を漏らします…
生徒達はそれを見て笑うんです…

「ほら ケツマ○コにチ○ポの
おもちゃを入れてどうだった？」

「はい…気持ちよかったです…」

ケツマ○コ同士で
いってしまいました…」

ああ…

その時の事を思い出すと

アヌスがキユンとして

オチンチンから

淫液が溢れ出してしまいます…

ボクはまた犬のように発情してきました
たまらない気持ちになりました…

「んんんん…」

「コイツおしりをまた振り出したぜ」
「いやらしい奴だな」

「ギヤハハ」

「先生」

「俺達のチ○ポが欲しいのかな？」

「クスクス もの欲しそうな顔を
しているぜ先生 アハハ」

「ください 先生のケツマ○コにおチ○ポ様を…」
「ボクは生徒達にお願いしました…」

ボクはこの学校の教師でした。

生徒達にシーメールに改造され
マゾ奴隷になりました。

今では毎朝、生徒達を
裸で出迎えています。



「アハハハ 変態教師が
またオチンチンを勃起させてるぜ」

「ヤダア きもちわるう」

生徒達はボクを見て嘲笑します…



「アレ見てよ オチンチンをピクピクさせてるう」
「いやだ 罵声を浴びせられて興奮してるウー」

「キヤハハハハ」

ボクの恥辱の日常は
こうして始まります…

